

フロンティアスクール用報告書

都道府県名	広島県
-------	-----

学校の概要（平成15年4月現在）

学校名	広島県廿日市市立平良小学校								
学年	1年	2年	3年	4年	5年	6年	特殊学級	計	教員数
学級数	4	3	3	3	2	3	1	19	29
児童数	129	93	105	85	80	86	1	579	

研究の概要

1. 研究主題

<p>一人一人に「確かな学力」をつけよう ～国語科・算数科での個に応じた指導をとおして～</p>
--

2. 研究内容と方法

(1) 実施学年・教科

<ul style="list-style-type: none"> ・ 1年生・国語科 基礎・基本の定着が大切な教科，学年であるため。 ・ 2年生・国語科 基礎・基本の定着が大切な教科，学年であるため。 ・ 3年生・国語科 児童の理解の状況に差が出やすい教科，学年であるため。 ・ 4年生・算数科 学校として，当該教科のチームティーティングに実績があるため。 ・ 5年生・国語科 児童の実態調査の結果から，児童の能力に差がある教科，学年であるため。 ・ 6年生・国語科 児童の実態調査の結果から，児童の能力に差がある教科，学年であるため。
--

(2) 年次ごとの計画

平成15	<p>テーマ 一人一人に「確かな学力」をつけよう ～国語科・算数科での個に応じた指導をとおして</p> <p>研究の見通し 研究仮説 児童の興味・関心や習熟度の程度に応じた「書く活動」や「評価を生かした指導」をすれば，児童の学習意欲を高め，一人一人の児童に「書く力」が確実に育つであろう。 児童の興味・関心や習熟度の程度に応じた指導や「評価を生かした指導」をすれば，基礎・基本の定着が図れるであろう。</p>
------	--

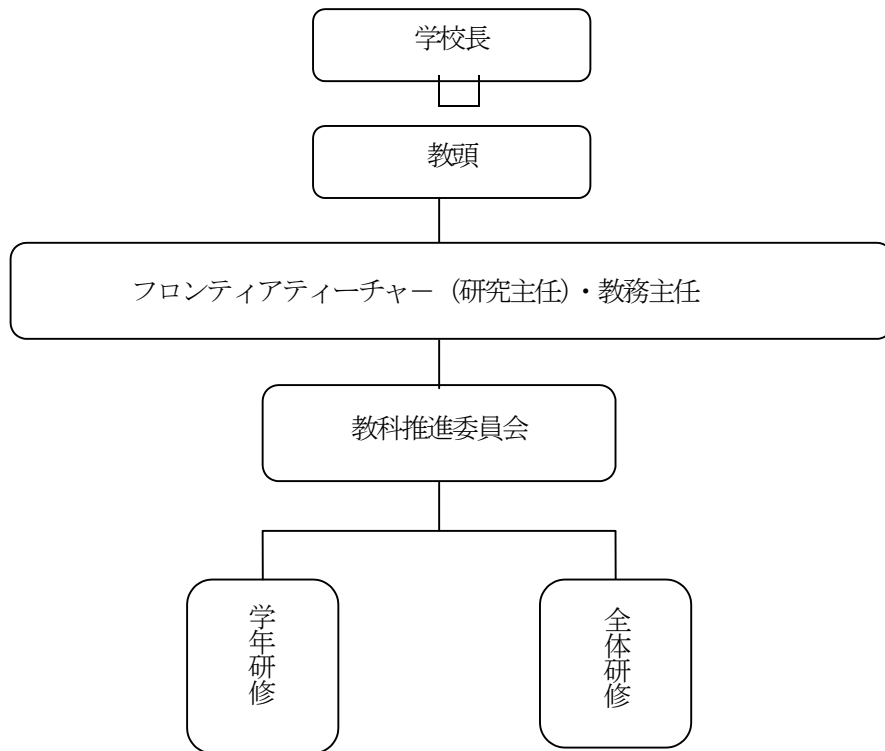
年度	<ul style="list-style-type: none"> ・国語科での「書くこと」を中心に、「個に応じた指導」や「指導と評価の一体化」の研究を通して、児童に「書く力」(表現力)を育てていく。 ・算数科での「チームティーチング」や「習熟の程度に応じた指導」のあり方の研究を通して、算数科の学力を高める。 <p>○ 研究の内容・方法</p> <ul style="list-style-type: none"> ・計画的な研究授業による校内研修(指導方法の改善,教材開発) ・習熟の程度に応じた指導(個に応じたワークシートの活用) ・コース別選択授業の取組み ・評価と指導の一体化(座席表,個人カルテの活用) ・ステップアップの取組み(視写,短作文,言語事項スキル) ・ことばの力を育てる(読書タイム,音読・朗読タイムの取組み)
----	--

平成16年度	<p>○ テーマ 一人一人に「確かな学力」をつけよう ～国語科・算数科での個に応じた指導をとおして～</p> <p>○ 研究の見通し 研究仮説</p> <p>◎ 児童の興味・関心や習熟度の程度に応じた「書く活動」や「評価を生かした指導」をすれば、児童の学習意欲を高め、一人一人の児童に「書く力」が確実に育つであろう。</p> <p>◎ 児童の興味・関心や習熟度の程度に応じた指導や「評価を生かした指導」をすれば、基礎・基本の定着が図れるであろう。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・国語科での「書くこと」を中心に「個に応じた指導」や「指導と評価の一体化」の研究を通して児童の表現力を伸ばす。 ・算数科での「チームティーチング」や「習熟の程度に応じた指導」など指導方法の研究を通して、算数科としての学力を伸ばす。 <p>○ 研究の内容・方法</p> <ul style="list-style-type: none"> ・指導力を高める授業研究と校内研修 → 指導目標の焦点化,授業観察簿の作成と活用 ・指導と評価の一体化 → 個人カルテ,座席票の活用児童の評価方法と評価規準の見直し ・指導方法の工夫 → チームティーチング,習熟の程度に応じた指導 ・年間指導計画の見直しと活用 ・「書くこと」と他教科との関連指導 ・ステップアップ年間計画作成と基礎・基本の定着 ・ことばの力を育てる取組み(読書タイム,音読・朗読タイムの取組み)
--------	---

(3) 研究推進体制

① 実践研究組織図

毎週定期的に、学校長、教頭、フロンティアティーチャー(研究主任)、教務主任が話し合いをする。



Ⅲ 平成15年度の研究の成果及び今後の課題

1. 研究の成果

(1) 児童の興味・関心や習熟の程度に応じた指導方法の工夫改善

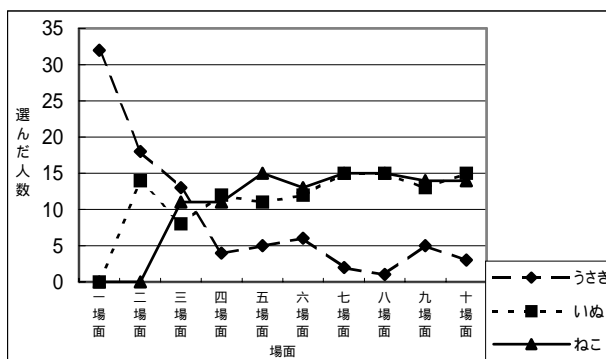
① 国語科

ア 習熟の程度に応じたワークシートを活用して書く力をつけることができた

1 学年 単元「ようすを おもいうかべながら (サラダでげんき)」

書くことが苦手な児童ができるだけ書くことへの抵抗をなくし、その上で、達成感も味わえるようなワークシートを10場面を通して各3通りのワークシートを用意した。

(ワークシート選択状況)



より個に応じた支援をするために、各場面ごとにワークシートを3種類用意し、児童に選択させた。

書くことを苦痛に感じていた児童も抵抗なくワークシートを選択し学習を進めることができた。自分でワークシートを選択することによって楽しんで学習に取り組むことができた。

うさぎコース・・・穴埋めの数が多い。

いぬコース・・・穴埋めの数が少ない。

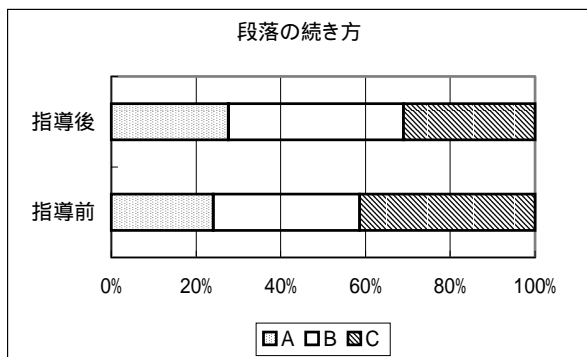
ねこコース・・・全文自分で書く。

場面が進むにつれて、書き慣れることで、いぬ、ねこコースを選ぶ児童が多くなっていった。

イ 個に応じたヒントカードを活用して書く力をつけることができた

3 学年 単元「まとまりごとに内容をとらえながら（自然のかくし絵）」

単元に入る前に、書く力の実態を分析し、本単元の目標に達成するためにつまづきが予想されそうな内容については、あらかじめ手立てとなるものを準備した。



事前に行ったアンケートの結果から、「習った漢字の表」、「作文の書き方」、「つなぎ言葉のヒント」、「何を書けばいいのかわかるカード」を作成し、活用した。

児童の実態に応じた「ヒントカード」を作成したので、使用頻度も高く、自分でさがしてやりきっている姿をよく見ることができた。

3 学年の「書くこと」の重点的な指導項目である「段落の続き方」は、指導前の実態調査では、「努力を要する」児童が 41% と高い。そこで、手立てとして、「構成メモの作り方」、「作文用紙の工夫」、「作文読み返しカード」等を活用し、指導を行った結果、31% となり 10% 減った。これらの手立ては、「努力を要する」児童に有効な手立てである。

ウ 習熟の程度に応じた「学習の手引き」を活用して書く力をつけることができた

6 学年 児童実態調査：5 月「新聞記事を読んで意見文を書く」

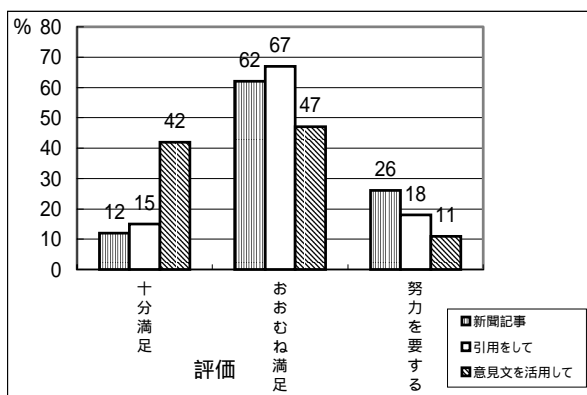
7 月 単元「本を読んで考えたことを書こう（ヒロシマのうた）」

11 月 単元「ロボットもの知情報誌を作ろう（人間とロボット）」

5 月に行った「新聞記事を読んで意見文を書く」の分析では、「事象と感想、意見を区別して書くこと」の項目で、「努力を要する」児童が 26% もいた。分析結果から手立てとして 1 学期は「本の引用を生かして」意見文を書いた。引用して書くことで、「十分満足」の児童が 3% アップし、「努力を要する」児童は 8% 減った。引用して書くことは、「努力を要する」児童に有効であった。

2 学期は、さらなる手立てとして「意見文の書き方の手引き」を作成し活用した。結果、「十分満足」の児童の数値が 27% アップした。分析の結果を見ると、「意見文の書き方の手引き」は「おおむね満足」の児童に有効である。

意見文の書き方が分かったことで、自分の力で書くことができる児童が増え、授業者も手引きを活用しながら具体的な支援を行うことができた。



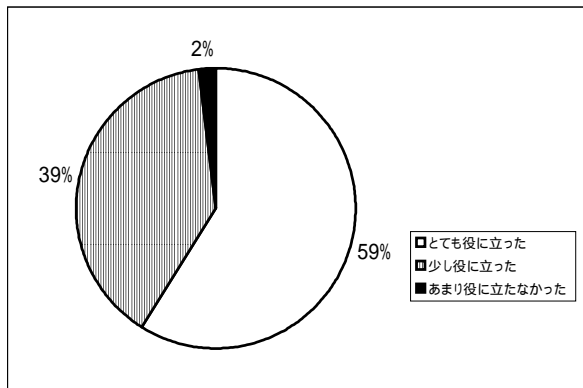
具体的な評価規準

十分満足・・・自分の立場を明らかにして、事象と感想、意見などを区別して書くことができ、論旨が一貫している。

おおむね満足・・・自分の立場を明らかにして、事象と感想、意見などを区別して書くことができる。

努力を要する・・・事象と感想、意見などを区別して書くことができない。

(それぞれの手立てをして書いた意見文の比較)
(「意見文の書き方」の手引きについて児童アンケート)



学習後「意見文の書き方の手引きについて」児童にアンケートを行った結果、「とても役に立った（59%）」、「少し役に立った（39%）」、「あまり役に立たなかった（2%）」であった。

理由は、「どんなふうを書くのかを迷わずに書けるようになった。」「私は意見文を書くのが苦手なので、手引きがあり分かりやす

かった。」「書き方がよく分かって、これからも使えそうだから。」「どのような書き方をすればいいのかが分かったから」など、「書き方がよく分かった」という内容のものが多かった。

算数科

ア 習熟の程度に応じたコース別学習を行うことで、発展コースの児童を伸ばすことができた

第4学年 単元「1けたでわるわり算」学級内TT

単元「2けたでわるわり算」学年解体（3クラスを解体） 習熟の程度に応じたコース別学習

コース分けは、プレテストの結果と日ごろの学習状況から、算数科TTの担当者が各児童のコースを提案する。点数の目安は、83点以上「どんどんコース」65点以下「じっくりコース」としている。担任と児童と話し合いの結果コースの決定をする。

じっくりコース・・・ 教科書の内容が理解できるようにする。設問を細かくし、極スモールステップで取り組む。既習事項に立ち返って考えられるようにワークシート、手引き等を活用する。

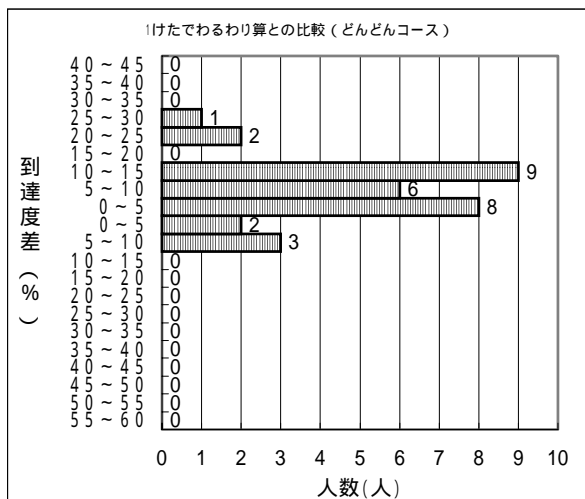
ぱっちりコース・・・ 教科書を基本にして定着を図る。スモールステップで課題に取り組む。

どんどんコース・・・ 説明する力（論理的思考力）や計算力をより伸ばす。まず、自力で取り組み、集団思考で深まった考え方をまとめる。発展問題のワークシートの活用。

〔単元の比較テスト平均点推移〕

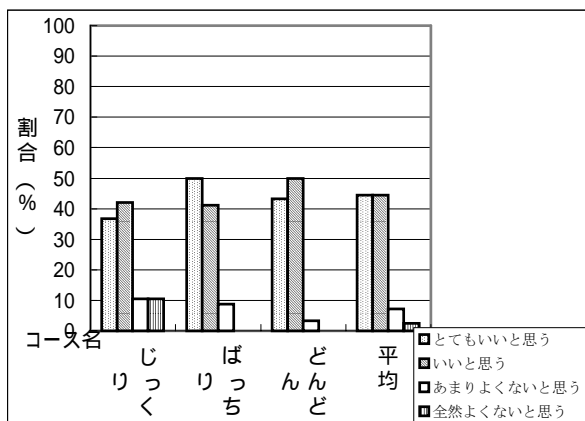
	じっくりコース	ぱっちりコース	どんどんコース	全体平均
「1けたでわるわり算」テスト	65.4	79.2	88.8	77.8
「2けたでわるわり算」テスト	70.4	79.1	95.6	81.7

「2けたでわるわり算」テスト結果と「1けたでわるわり算」テスト結果を到達度で比較すると、全体平均は+3.9%と上がっている。「じっくりコース」+5.0%「ぱっちりコース」-0.1%「どんどんコース」+6.8%で、「どんどんコース」児童の力を最も伸ばしたといえる。



「どんどんコース」の児童の力を最も伸ばすことができた理由として、学年を解体することにより、学級の枠を外すことで、多様な見方や考え方にふれることができ、児童相互に競い合う雰囲気できたためであると考えられる。また、発展的な計算問題や問題作りなどに取り組むことで、より計算力を伸ばすことができた。

(習熟の程度に応じたコース別学習について
児童のアンケート結果)



習熟の程度に応じたコース別学習について、児童のアンケートを行った所、「とてもいいと思う」「いいと思う」が平均でも70%を越える結果となった。理由は、「自分に合ったコースが自分で選べて、自分のペースで勉強できるから。」「一人一人丁寧に教えてくれるから。」「自分に合っていなかったり、よく分からなかったりしたら、違うコースに移れるから。」「いろいろ違う意見が聞けるから。」

ら。」「分かれた方が発表しやすいから。」などであった。

(2) 評価を生かした指導方法の工夫改善

① 国語科

ア 個人カルテを活用して評価を生かした指導を行い、推敲力をつけることができた
2年生 単元「おもちゃの作り方を教えるお店を作ろう」

児童の課題である言語事項(文字・助詞・つなぎ言葉)の定着を図るために、「おもちゃブックを作ろうふりかえりカード」を毎時間活用し、個人カルテを作成した。

(自己推敲数と授業者推敲数)

		個人カルテ							
		1回目		2回目		3回目		4回目	
児童名		児童	授業者	児童	授業者	児童	授業者	児童	授業者
1		0	1	3	2	3	2	0	2
2		2	0	0	0	0	0	0	0
3		3	3	5	0	2	0	4	1
4		0	4	4	1	0	1	0	0

○ 推敲項目

- ・まちがっている字はないかな
- ・ぬけている字はないかな
- ・習った漢字は書けているかな

2回目以降の授業者の推敲数が大きく減少しているのは、1回目の後、個人カルテを生かして指導を行ったからである。児童の正しく書こうとする意識が芽生えたと考えられる。また、さらに、推敲の習慣がついてくると、下書きの文章自体に間違いが少なくなっている。

個の伸びとしては、3番の児童は、推敲している数が多いが授業者の推敲数が少ないため、自己推敲力がついたことがわかる。

(3) 基礎・基本の定着

本校の取り組みとして、国語科の「書く力」の基礎・基本、算数科の基礎・基本の定着を図るために、ステップ・アップ（第1・3・4・5木曜日5校時）を設定している。

開始10分間は、毎回、全校一斉に視写に取り組む。教科書教材をノートに写し、段落・行数を自己評価カードに記入する。速さだけを競うのではなく、第一に「丁寧さ」、第二に「正確さ」、第三に「速さ」である。

視写後、言語事項のスキルやテーマを決めて「短作文」に取り組んでいる。ステップアップの年間計画を立て、「書くこと」の5つの内容が偏らないように計画的に取り組むこととしている。

① 国語科

ア ステップ・アップで視写を10分間行い、段落意識を定着させることができた

5学年 基礎・基本の定着を図るステップアップ

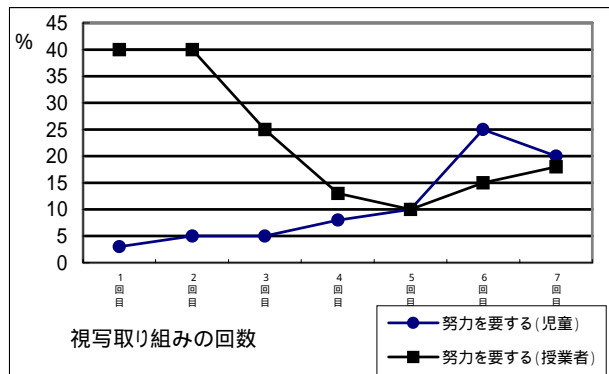
一人一人が異なった課題を持っているため、個々のつまずきを予測するために個人ファイルを作成する。授業の中で、どの子も学習目標を達成できるように、個に応じた「習熟度別学習プリント」を用意した。

10分間の視写後、「改行ができていないか（段落意識）」自己評価をした。視写取り組み1回目（9/4）児童は、自分が改行できているかどうかよく考えず、自己評価を行っている。

そのため、授業者と児童の評価の差が大きい。5回目（10/13）では、授業者と児童の評価が重なり、自己評価力がついたことが分かる。

視写の回数を重ね、自己評価の回数も重ねることで、正しく評価ができるようになった。国語科の授業でも段落意識をもって書くことができ、成果が現れている。

（視写の自己評価と授業者評価の比較）



2. 今後の課題

(1) 国語科

- 習熟の程度に応じた「書くこと」の指導形態の工夫。
- 論理的な思考力を育てる「書くこと」の教材開発。
- 「書くこと」の系統的な基礎・基本の学習技能の研究。
- 他教科等での書く活動との関連の研究。
- 「書くこと」における数値化をするため評価方法。

- 系統的な「手引き」「ワークシート」の作成。
- (2) 算数科
 - 適切なコース選択の力をつける。
 - 児童の実態や単元の内容に応じて様々な指導体制・指導方法を組み合わせる。
 - 学年間の指導の連携，系統的な指導の確立。
- (3) 共通
 - 個人カルテや座席表を生かした個に応じた指導の研究及び評価方法の工夫。
 - 校舎の利点（ワークスペース，多目的スペース，特別活動ルーム など）を有効に生かした指導形態の工夫。
 - 習熟の程度に応じたコース別学習の評価規準の見直し。
 - 発展的な学習内容の教材開発。

IV 学力等把握のための学校としての取組み

- 国語科についての意識調査（4月上旬実施 5・6学年）
国語科についての意識を調査し，個に応じる手立ての具体化を図る。
- 学力実態調査CRTテスト（4月下旬実施 2～6学年）
国語科の学力実態調査を行い，児童一人一人の実態を把握する。
- 「書く力」の実態調査（視写）（4月下旬 5・6学年）
10分間視写を行い，児童の書く力を分析する。
- 「書く力」の実態調査（作文）（5月上旬 2～6学年）
各学年，テーマを決めて作文を書き，各学年の実態，学級の実態，児童一人一人の実態を分析する。

V フロンティアスクールとしての研究成果の普及

1. 授業公開の開催

- (1) 日時 平成16年1月23日（金）午後13時～16時40分
- (2) 内容

① 研究公開

- 1年生 国語科 学級一斉指導（個に応じる指導・ワークシートの工夫）
- 2年生 国語科 学級一斉指導（個に応じる指導・ワークシートの工夫）
- 3年生 国語科 学級一斉指導（個に応じる指導・ワークシートの工夫）
- 4年生 算数科 習熟の程度に応じたコース別学習（学年3コース）
- 5年生 ステップ・アップ ティーム・ティーティング
- 6年生 コース別学習（学年4コース）
- わくわく 合科・統合（個に応じる指導）

② 研究経過報告

③ 講演『「書くこと」の学習における個に応じた指導』

安田女子大学教授 山本 名嘉子先生

(3) 参加者 104名

廿日市市	その他県内	県外	学生
42	28	1	3

2. ホームページでの情報提供

- (1) アドレス（<http://ww4.enjoy.ne.jp/~herasho>）
- (2) 内容

本校の取組み。授業公開案内。授業公開参加申し込み。

3. 資料提供

公開研究に参加された学校に、授業で活用したワークシートを提供。

次の項目ごとに、該当する箇所をチェックすること。(複数チェック可)

【新規校・継続校】	1 5年度からの新規校	1 4年度からの継続校		
【学校規模】	6学級以下 1 3～1 8学級 2 5学級以上	7～1 2学級 1 9～2 4学級		
【指導体制】	少人数指導 一部教科担任制	T . Tによる指導 その他		
【研究教科】	国語 生活 体育	社会 音楽 その他	算数 図画工作	理科 家庭
【指導方法の工夫改善に関わる加配の有無】		有	無	